

保育の現場から

あかずきんごっこを楽しむ中で

篠澤 恵理

子どもたちは、何かになりきって遊ぶのが大好きです。同じものになったとしても、一人ひとりが違ったイメージをもっているので、楽しみ方が違っていておもしろいと思います。

次々にイメージがわいてくる子、友達のまねをしながら少しずつ自分の動きが表せるようになってくる子、なりたい気持ちはあっても恥ずかしかっている子など、さまざまです。

一方で、少しさめた感じで、なりきって動けない子もいます。「周りのことが気になっているのかな？ いろいろ考え過ぎてしまっているのかな？」と思うこともあります。自分と違う何かになるの

は、ちよつとドキドキすることなのかもしれない。せん。

昨年度、二年保育の四歳児、二十三人の子どもたちと一緒に、十二月ごろから毎日楽しんでいた遊びをつなぎながらつくっていった劇遊びを振り返り、「何かになって遊ぶこと」について考えてみようと思います。

あかずきんの絵本を読んだことから

『赤ずきん』（グリム文 バーナデイト・ワッツ 絵 生野幸吉訳 岩波書店）の絵本を読んだ後、すぐに「あかずきんごっこしよう！」という

声が上がりました。今まで、『おおきなかぶ』
(A・トルストイ再話／内田莉莎子訳／佐藤忠良
画 福音館書店) や、『おおかみと七匹のこや
ぎ』(フェリス・ホフマン絵／瀬田貞二訳 福音
館書店) の絵本を読んだ後にも劇遊びを楽しんで
きたので、すぐに動いてみたくなったようです。
「あかずきんがいい」「おおかみがいい」など、
なりたいたい役を決めていると、「ねこも出てきてい
たから、ねこになる」とAちゃんが言いました。
思いがけないAちゃんの一言に「え? そうだっ
た?」と、みんなでもう一度絵本をめくってみる
と、森を歩いている場面に小さなねこが描かれて
いました。「本当だ! かわいいね」と、みんな
で喜び、「ほかにもいるかもしれないから、もっ
と探してみよう」と言うので、もう一度絵本をは
じめから一ページずつめくってみることにしまし
た。「あ、ここでおおかみがあかずきんのことを

見ていたんだよ」と気づく子や、おばあさんに
りすましているおおかみの様子を見て「おばあさ
んを飲み込んでいるから、布団が膨らんでいる
ね」と、しみじみ眺めている子もいました。

結局、ねこ以外は見つけられなかったのです
が、細かくリアルに描かれている絵をじっくりと
なぞりながら見る機会となりました。見方を変え
ると、見えてくるものも違ってきて、絵本の楽し
み方が広がりました。

あかずきんごっこ始まる

「ねこも出てきたのだから」ということで、絵本
の内容に加えて、森の動物たちも出てくることに
なり、ねこのほかに、うさぎ、くま、ぞうなど、
自分のやりたいものをアピールして役を決めてい
くと、肝心なおおかみ役になりたいという子が誰
もいなくなってしまうました。「悪いやつだから

いや」と言うのです。

「先生やってよ」と言われ、おおかみをすることにしましたが、ふと頭の中で苦い経験を思い出しました。以前、三歳児学級を担任したときのことです。「三匹のこぶた」の遊びをしたときに、私がおおかみ役をやったのですが、ついつい怖いおおかみになり過ぎて、子どもたちを怖がらせてしまったのでした。

今度はそのようなことがないようにと、あれこれ考えて慎重にすると、ちよつときこちないおおかみとなってしまいました。考え過ぎるあまりに、役になりきって動けないでいる子の気持ち少しわかったように感じました。

男の子たちの人気を集めたのは「狩人」です。正義の味方のようなイメージをもつ子もいて、「今助けるからね」と言つて、ポーズをとりながら登場することが楽しいようでした。

終わるとすぐに「もう一回！」という声が上がりました。「どこへ行くの?」「お見舞いに」「気をつけてね」という繰り返しのやりとりが楽しかったようです。そして「また先生、おおかみやってね」と言われました。

私なりに演じたおおかみでよいと思つてくれたのかと思うと、少しほつとしました。私も子どもたちに励まされて、今度はもう少し楽しんでおおかみになろうという気持ちになりました。でも、「やっぱりおおかみになりたいと思う子はいないのかな?」と心配にもなりました。

いつもお母さん役?

Bちゃんは、劇遊びが終わるたびに私のそばまで来て、「次もお母さんをやるからね」と言いました。何度か繰り返して試してみても、やはりいつでもお母さんになります。お母さん役は、あかず

きんに「気をつけて行ってらっしゃい」と言うくらいしか出番がありません。それでいいのかと意外に思っただけでみると、「おおかみに食べられたくないの」ということでした。

狩人になった子どもたちも、「食べられちゃうのより狩人がいいよ。助けるのがかっこいいよ」と言うのです。『おおかみとこやぎごっこ』をしたときも、時計の中に隠れたやぎになりたいという子が多いのと同じなのかなと思いました。子どもたちは、「またやりたい」と言って、『あかずきんごっこ』をしたがるのですが、やるたびに動物になりたいという子は減っていきました。



「うさぎになりたいけど、食べられちゃうのは怖いな」と言う子もいたので、「おおかみが、『後で食べよう』と言って、みんなを奥の部屋に閉じ込めることにしようか」と聞いてみると、「それがいい！ それならうさぎになる」と、動物人気が復活しました。

それまで楽しんできた「おおかみとこやぎの鬼ごっこ」も「あかずきんの鬼ごっこ」としてリメイクしました。

「おおかみさん、どうしてお口が大きいの？」お前を食べるためにさ！」などと、鬼遊びの陣地から逃げる前にやりとりすることが楽しくなつてくると、おおかみの人気が急上昇！ 強そうに、怖そうに、なりきって動く子が増えてきました。狩人になりきって、おおかみにつかまった子を助けることも楽しいようで、繰り返し遊びました。

少しさめた感じで、なりきって動けなかったC

君も、鬼遊びのやりとりの中では、構えがなくなり、伸び伸びと動くようになっていきました。

そして、『あかずきんごっこ』としてこの鬼遊びの要素も加え、オリジナルの話をみんなで考えていくようになりました。

レスキュー隊も『あかずきんごっこ』に？

ちょうどこのころ、毎日楽しんでいる遊びに、『レスキューごっこ』がありました。大きくなったらレスキュー隊になりたいというD君の影響で始まった遊びです。

中型積木で消防車を作って乗り込み、後ろにクレーンに見立てた縄跳びの縄をぶら下げて、誰かを救出しているつもりになって遊んでいました。園帽子をレスキュー隊の帽子にしてかぶっているのです、レスキューの意味がわからない子も、同じ帽子をかぶり、縄を手を持つことから始めて、少

しずつ遊びが広まってきました。縄は、時には消防隊のホースになって火事を消し、時にはレスキュー隊の酸素ボンベのチューブとしてペットボトルにつなげて背負って歩くなど、『レスキューごっこ』の必須アイテムとなりました。

ある日、あかずきんの鬼遊びをしていると、レスキュー隊が、おおかみにつかまった子を助けにやってきました。それがとてもおもしろくて、とうとう、『あかずきんごっこ』の劇遊びの中にも、レスキュー隊が出るようになりました。レスキュー隊が出ると、「狩人はどうなってしまおうだろうか？」などなど素朴な疑問が出てきました。話が、話のつじつまを合わせながら、毎日やりたい内容に合わせて話の流れを変えて、ワクワク（子ども）ドキドキ（私）楽しんできました。

二月初旬の生活発表会では、この劇遊びを保護者に見てもらいました。また、生活発表会の翌日

にも「きょうもやろうね」という声が上がりました。発表会がゴールでなく、まだまだ続けたい気持ちになったことは何よりでした。

子どもたちが、お話の世界に入り込み、自分と違う何かになって遊ぶことについて振り返ってみると、改めて一人ひとりがさまざまなことを味わっているということがわかりました。

絵本の中にある小さなねこを見つけると、すぐに自分も絵本の中の一員になれるAちゃんも、いつもお母さん役になって、おおかみに食べられてしまうのが怖いと思っていたBちゃんも、絵本の世界に入り込んでいるからこそ感じたことなのだと思います。C君が、何となくのりきれないでいたときに、私は、「どうしたらなりきって表現できるのかな」などと思ってしまいました。C君なりに、鬼遊びを通して何かになる楽しさを感じ

ていたのです。直面しているときは、必死に進めていくことばかりに気持ちが向いていたので、今こうして振り返ってみると、一人ひとりの感じ方に、私がどれだけ心を向けていけるかを試されているような気がします。

自分と違う何かになったときには、今まで見えていなかった世界が広がっていくのかもしれない。ドキドキしたり、ワクワクしたりしながら、新しい自分に出会えることもあるのかなとも思います。繰り返し楽しんできた遊びは、一年がたとうとする今、一人ひとりの心の中にどのような残っているのでしょうか？そして、今年は劇遊びをつくり上げていく中で、どんなドラマが生まれるのか……。目先のことに追われる気持ちを抑えながら、おもしろがって見つめる目を忘れないようにしたいと思います。

(北区立さくらだ幼稚園)